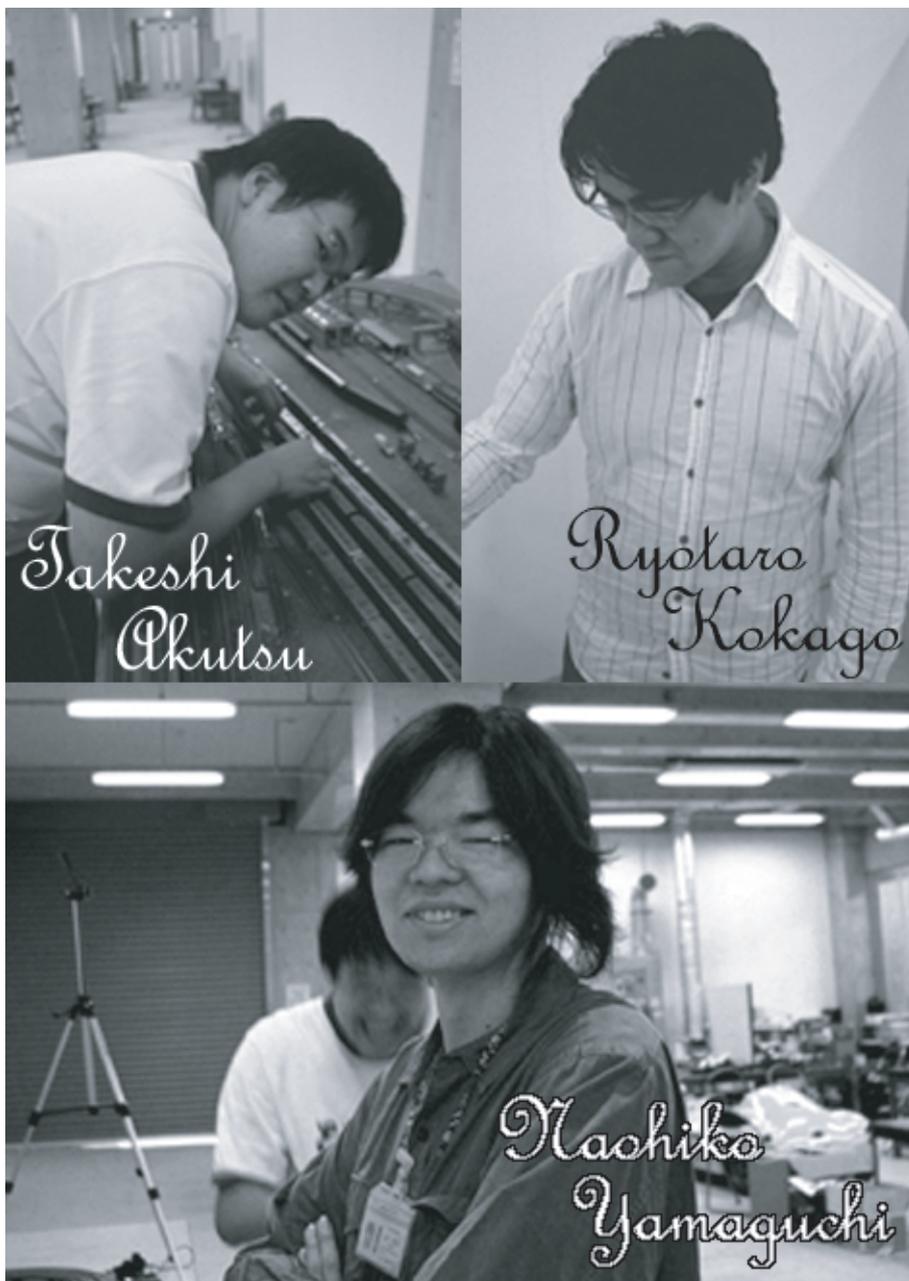


# Urban Tech Railway Journal

創刊準備号 Vol.000



工学院大学 鉄道研究同好会

工学院大学鉄道研究同好会 会誌

URBAN TECH  
RAILWAY JOURNAL

創刊準備号

Vol.000

2006/10/28

工学院大学鉄道研究同好会



# 目次

第1章	皆様へのご挨拶	5
1.1	顧問より	5
1.1.1	高木亮先生	5
1.2	発起人より	6
1.2.1	阿久津剛	6
1.2.2	小籠亮太郎	7
1.2.3	山口直彦	8
1.3	会員より	10
1.3.1	阿部大峰	10
1.3.2	天野哲生	11
1.3.3	石川和嗣	11
1.3.4	鴨井昌司	12
1.3.5	佐宗友裕	12
1.3.6	田淵正紀	13
第2章	沿革及び活動予定	15



# 第1章 皆様へのご挨拶

## 1.1 顧問より

### 1.1.1 高木亮先生

#### 「UTRJ 創刊準備号によせて」

顧問 高木亮 助教授 [電気システム工学科]

昨年のおまごろ、僕はまだ英国にいた。鉄道の研究に従事していたという点にはわからないが、国が違えば言葉も空気も食べ物も違う。だいいち、鉄道発祥の国なのに、英国にはまともに走る鉄道がなかった…。だから、よく自動車を駆って遠出をした。その自動車は「柿原号」といって（柿原さんというひとから譲り受けたからだ）、プジョーの306という10年落ちのやつだった。

2006年4月に僕は工学院大学に職を得て、英国から日本に戻ってきた。日本には、まともに走る信頼性の高い鉄道があり、おいしい料理がある。そして工学院大学には親切な同僚や優秀で面白い学生たちもいる。いい雰囲気の中で、幸せな毎日である。ちなみに、まだ自動車は購入していない。

いまでも、英国の夏の空の青さや、丘から眺める一面の芝生（と、数え切れないくらいの羊たち）、あるいはそういうものを見つけにいくため走った田舎道などを、懐かしむことはある。でも、それはもう過去のことになった。

手許には、2006年6月14日付、阿久津君・小籠君・山口君の連名となる「顧問の依頼」なる手紙がある。鉄道研究同好会を始めたいから、顧問を引き受けてくれ、というわけだ（関係ないが、6月14日は僕の誕生日でもある）。工学院大学は工科系の大学なのに、なぜか鉄道研究会はいままで存在しなかったという。なんとも不思議に思えたものだ。だが、この手紙、あるいはそれをとりまく人々の動きによって、そんな「鉄道研のない工学院大学」もはや過去の存在になった。

時間は、常に一方にしか流れていかない。後戻りはできないのである。

鉄道研究同好会も、立ち上がったからには、後戻りはできない。インターネット全盛の現在、大学鉄道研はどこも人集めに苦労していると聞く。鉄道趣味誌も、大きな影響を受けている。そんななか、我々はどのようにこの同

好会を盛り上げていくのか。難しい船出だと思うけれど、それはたぶん、こんな時代における鉄道趣味の本質を見極める旅でもある。我々は何を楽しみ、何ににっこり笑いかけることができるのか。

そのほほえみの先に、我々の未来があるはずだ。まずは3年後、部への昇格を目指して、そのあとは5年後に、5周年記念行事ができることを目指して。ともかく、一步一步、進んでいこう。いまのところ日本一新しい大学鉄道研が、今後順調に発展していけるように、僕も微力を尽くしたいと思っている。

まずは、UTRJ 創刊準備号の発刊、おめでとうございます。

## 1.2 発起人より

### 1.2.1 阿久津剛

#### 「私の一言で」

二部副代表・発起人 阿久津剛 [二部 電気電子情報工学科 4年]

鉄道研究同好会 第2部副代表八王子輪講担当制御システム研究室所属の阿久津 剛でございます。

私が大学に入学したのは2002年4月でした。その頃は鉄道研究部というサークルみたいなものはなく、その後も鉄道研が作られるという話も聞くことなく大学生生活も5年目に入った頃、弱電実習室の山口君小箆君と学内のバイトで知り合いになりました。ある日の事、ちょっと用事があり研究室のある八王子から2部の授業のため新宿へ夕方、行き、弱電の山口君と雑談している中で“この大学、何で鉄道研がないんだろうねえ～、不思議だね”と言った所、“じゃあ作りませんか?!”と言ったので二つ返事で“やろう!!”でも正直、この時は今のように大人数になり、八王子まで波及するとは思いませんでしたので今、この状況は想像をはるかに超えており私自身、夢でも見てるんじゃないかと思っているぐらい信じられないです。

鉄道研設立当初は、私が2部代表を務めておりましたが大学院受験があったため現在は2部副代表の方に退き、今は研究室のある八王子キャンパスの方で水曜日の5時限目(16:30~18:00)を使って1・2年生の輪講を担当しております。輪講では1・2年生に対して鉄道に関する記事を隔週で発表してもらっています。まだ2回しかやっておりませんが初回の発表からかなり中身が濃いので正直、驚いております。またこの輪講では私が1年から3年まである駅で駅員をしていたんですが、そこで自分が五感をフルに使って得られた現場の経験を少しずつですが彼らに話していければと思います。

次に私自身の専門ですがやはり駅員をやっていたことがありダイヤ復旧までのプロセスを見ていたのもあって運転整理ですかね。他に卒論のテーマを“鉛蓄電池の寿命評価”としているので電車の蓄電池(UPS:無停電電源装置)などにも興味があります。これからは駅員豆知識・旅行・車両形式の解説などに力を注ぎたいと思いますし、ただ今、計画段階に上がっている“本物の電車を営業線で走らせよう”というプロジェクトも来年度から始動する予定ですがこれについても私が先頭に立ってやりたいと思っています。

これからは火山が噴火するようなたくさんの企画などを出してまいりますので暖かく見守っていただきたいです。

ですのでこの会誌を見て少しでも鉄道に興味を持った方あるいは電車プロジェクトに参加してやってみたいと思ったそのあなた！待ってます！

最後は宣伝じみてしまいお叱りを受けそうですがそこはご勘弁を！

では、最後に!! 車掌さんのお決まりセリフで!

「(駅名)でえ〜す。反応停止!反応進行!!(発車ベル)モニターよし!側面よし!(...戸締め...)モニターよし!側面よし!ブー!!(発車ブザー)」

この先事故なく、Let's begin!!

### 1.2.2 小籠亮太郎

#### 「工学院大学鉄道研究同好会 発足及び会誌発刊にあたって」

第一部代表・発起人 小籠亮太郎 [一部 電気工学科4年]

まず初めに、工学院大学鉄道研究同好会の発足にあたり、ご協力下さった先生方、学生課の方々、一部学生自治会サークル局の方々に厚く御礼を申し上げます。

私は、物心ついた時から電車が好きだったようで、幼少の時に住んでいた東京都品川区大井のマンションの屋上からよく東急大井町線や国鉄山手電車区(現:JR東日本東京総合車両センター)にいる山手線の車両をよく見ていたものです。このころはまだ、東急大井町線には東急5000系(通称:青ガエル)などの18m級車両もまだ走っており、当時のことを非常に懐かしく思い出すと同時に、走る車両も駅の雰囲気も随分変わったという印象を受けます。また、父が鉄道好きであったこともあり、よく一緒に首都圏中心の鉄道に乗りこいた思い出が蘇ってきます。

その後、航空(旅客機中心)にも興味を持ちつつ、私は中学校に入学しました。そして本格的な鉄道趣味として始めた分野は写真でした。私の中学校

には鉄道研究部は無かったので、創作部（主に写真に関することが活動の中心）に入部して、鉄道写真を撮っていました。高校では、鉄道研究同好会に入会し、鉄道模型レイアウトや鉄道写真を主に趣味の中心としていました。

2003年4月、工学院大学に入学しましたが、交通システムの研究室がある大学なので、鉄道研究のサークル等もあるものと思っていましたが、意外にもそのようなサークルは存在していませんでした。私は大学入学から2006年3月まで、学園祭（八王子祭・新宿祭）の実行委員を務めていましたが、学園祭実行委員会に入った理由の1つとして、あまり根拠はないものの、鉄道研究のサークルが本学に存在していなかったことが挙げられます。

そして、4年生に進級し、今年度着任された高木先生の研究室に配属となりました。5月ごろ、高木先生から鉄道研究のサークルを発足してはどうかとのご意見があり、サークル発足のための情報を集めていたところ、6月ごろ、2部の阿久津さんと山口さんが同時にサークルの発足を考えていて、発起人に加わってほしいという連絡がありました。特に山口さんは、昨年より電気系学科の実習室の学生職員を務めていることもあり、私が3年生の時から実験の折に鉄道の話に花を咲かせていたので、その後は発足に向けての準備が大きく進み、去る2006年7月24日、一部自治会公認のサークルとして発足することが出来、今回の会誌創刊準備号の発刊となりました。

現在は、鉄道模型レイアウトの設計・製作及び本学行事（オープンキャンパス・理科教室・八王子祭・新宿祭）での展示、1・2年生向けのゼミの開催、旅行及び合宿の開催、会誌の発行準備などの活動を行っており、9月末現在、会員も15名と順調に入会者が増加しています。3年後の一部文化会所属団体への昇格（部活への昇格）を目指して、他大学の鉄道研究サークルが行っていない新しい活動を展開し、当サークルが大きく羽ばたいて行けるように努力して参りますので、これからもご指導・ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

### 1.2.3 山口直彦

#### 「工学院大学鉄道研究同好会 発足に寄せて」

第二部代表・発起人 山口直彦 [二部 情報工学コース3年]

まずは、当会の活動に興味を持っていただき、この会報を読んで下さっている皆様に感謝申し上げます。また、発起人の私が言うのも不思議なことで、鉄道研究同好会へ設立おめでとうと言いたいです。当会は生まれるべくして生まれた同好会であると思っておりますから、おめでとう、と言いたいです。

私と阿久津さんの間で「この大学に鉄研がないのはおかしい！」という会話が起ったのが2006年の6月くらいだったでしょうか。折しも、定年を控

えた曾根先生の後任として高木先生が着任した時でもあり、活動を始めるには丁度いい時期でありました。ならば作ろう、という事で準備をしてみると、なんとほとんど時を同じくして、小籠さんや高木先生がも同じように鉄研を作ろうとしていたのです。その後、正式に曾根先生、高木先生、竹本先生に特別顧問、顧問、副顧問をお願いし、鉄道研究同好会は活動を開始したのです。動いてみれば一挙に人が集まり、いささか急発進とも思えるくらいたくさんプロジェクトが同時に動き始め、八王子オープンキャンパスでの模型展示を皮切りにして会の活動は現在も順調に続いています。

最近はどこかの大学でも鉄研の活動は下火になりつつあるようです。そんな時代にも関わらず鉄研を創立した以上、私たちは常に新しい鉄研の活動スタイルを確立する必要があります。そこで私は常に当会のテーマとして「工学院らしい活動」を掲げてきました。大学生とはいえ私たちもエンジニアの一員。そのため当会の活動はどちらかというと鉄道の技術や知識を高める活動に重点を置いています。具体的には査読付きの会誌を作り互いの知識を交換する事や八王子において行われている1,2年対象のゼミなどが挙げられます。

私自身の専門(鉄道好きはその興味に応じて専門分野、あるいは得意分野を持っている事がほとんど)は主回路しゅかいろを中心としたハードウェア、及び鉄道写真ですので、会報ではその辺の技術を解説したものを書いて行きたいと思っています。とはいえ物心着いた頃から鉄道を愛す他の会員たちに比べ、私は高校2年から鉄道を始めた超スロースターターですので知識としてはつたないものですが、その分、初心者向けの平易な解説を書こうと思っています。

そもそも、鉄道に興味などなかった私がなぜ高校2年になって鉄研に入ったかと言うと、写真部に所属していた私に鉄研の同級生だった友人が「鉄道写真の撮り方を教えてくれ」と話を持ってきたから、という経緯があります。そのためか、普通の鉄道好きが撮る写真(いわゆる編成写真等)はあまり好まず、一ひねり、二ひねりした鉄道写真を模索しているところでもあります。こちららも機会をみて何らかの形で発表できればいいな、と考えているところです。

鉄道という趣味は一説によれば鉄道と共に生まれたということです。当たり前のように思えるかもしれませんが、鉄道の歴史が19世紀の初頭であることを考えると、大変に歴史の深い趣味であると言えます。一般の人が思い描くオタクなイメージにくらべ、実際には鉄道という趣味は高度な知識を要求されるものであり、その歴史を語れば、これは十分に文化的価値のあるものでしょう。フランスの諺によれば、「趣味を持たなければ、天才も高等な馬鹿にすぎない。」と言います。文化的にも、工学的にも価値を見出せるような活動を目指せばいいなあ、と思っています。

ATS始動、ブレーキ圧力よし、かんかい緩解よし、EB点灯圧力よし、緩解よし。戸閉めよし。出発信号は進行、定時発。願わくば工学院大学鉄道研究同好会の行くところ、全てGG(高速進行)で運行できますように！

## 1.3 会員より

### 1.3.1 阿部大峰

#### 「私の鉄道 history」

阿部大峰 [一部 電気工学科 4年]

筆者は父親が鉄道に関する職種（鉄道運転士）をしており、幼少の頃から電車を眺めたり乗ったりすることが好きでした。

鉄道模型を始めたのも小学生になる直前の頃でした。よく両親にねだっては子供の買うものではないと叱られたものでした。本物に似ていてHOゲージよりも安価であるを知ったのもちょうど中学生になる頃で、時間を見つけては大宮の高島屋の地下にあるレイアウトへ自持ちの模型を持っていき、走らせていた記憶が今でもよみがえります。

高校の頃になると筆者は鉄道模型の概念から飛び出し、フリーパスを買い新幹線や特急電車などに乗るようになり、色々な地域に足を運びました。そこから見える車窓の風景や駅舎、電車、その街の風情に酔いしれていました。今でも一番記憶に残っているのは3連休フリーパスのグリーン車乗り放題で、東北や上越などを旅行したことです。今でもこれらの切符を大切に保存しています。

鉄道の楽しみ方は人それぞれであり、模型、写真、切符コレクションなど様々です。大学に進学すると、あまり勉学に差し支えないようにしていました。筆者は大宮駅で見かけた駅案内補助（駅員）のアルバイト募集のポスターに目を奪われ、すぐにこのアルバイトに申し込みました。勤務先はJR東日本、東北本線（宇都宮線）の白岡駅でした。こちらは朝早いアルバイトというのがネックでしたが、アルバイトをしながら好きな電車（当時はE231系にグリーン車が導入された頃で営業はしていなかった）を眺め憧れの制服に袖を通したことに感激したのを覚えています。期間限定のアルバイトではありましたが、私の将来像を気にかける時期でもあり、大変貴重な体験させていただきました。

現在、筆者は工学院大学の曽根悟教授らの下で研究を進めています。また、曽根教授らの助言、ご協力などもあり来年度からは無事、東海旅客鉄道（JR東海）への内定も決定しました。

今年度から発足したこの鉄道研究同好会（Urban Tech Railway Journal）がいよいよ軌道にのり、創刊準備号までこぎつけることができたのも筆者らをサポートしていただいた顧問や特別顧問、諸先生方のおかげであることを大変感謝しております。しかし、この同好会としての活動はこれからが本番であり、これからも未永く存続できることを願っております。筆者は4年生という立場から後半年でこの大学から去りますが、この同好会のOBになる

ことを誇らしく思えるように今年度、一生懸命に精進してまりたいと考えています。また、同好会を通じ、たくさんの鉄道員が育っていくことを同時に期待しています。

### 1.3.2 天野哲生

#### 「私と大学と鉄道と」

天野哲生 [一部 電気システム工学科 1 年]

私の名前は天野哲生と言います。電気システム工学科 1 年です。

鉄道が好きで、鉄道研究同好会に入りました。

私は、鉄道の中で、特にVVVFインバータ制御車の走行音に興味を持っています。3歳の時に、VVVFインバータ制御が使われている小田急1000形に乗り、独特な変調する走行音(磁歪騒音<sup>じわいそうおん</sup>)に興味を持ちました。この音を聴くことが大好きで、車両の床に耳をつけて走行音を聴いていました。磁歪騒音の発生過程と様々な磁歪騒音が存在する理由について学問的に学ぶため、大学に入りました。鉄道研究同好会では、今まで以上に鉄道について様々なことを学びたいと思っています。

### 1.3.3 石川和嗣

#### 「私が鉄道研に入るに至った経緯」

石川和嗣 [一部 電気工学科 4 年]

まず筆を執るにあたり、私を同好会に誘って頂いた発起人の小籠君、阿久津さん、山口さんにお礼を申し上げます。

私にとって鉄道とは、単なる交通手段の一つであり、特別な感情は特に持ち合わせていませんでした。(このような書き方をすると多方面から叩かれそうですが)

大学の二年までは通学といえば自転車で、鉄道はたまに遠出するときだけ利用するといった程度でしたが、三年から電車通学が始まり、輪講でLRT<sup>1</sup>について調べるようになり、次第に鉄道への興味が出てきました。卒論生となる四年でも、縁があって電気鉄道研究室への配属が決定し、同年六月、発起人より同好会を設立するということでお誘いを受け、勉強の一環という形で参加させていただくことになりました。

<sup>1</sup>LRT(Light Rail Transit) : 次世代路面電車。都市内や近郊での運行を行う中小規模鉄道全般を指す。

私は模型のレイアウト作成などの制作活動の方が正直なところ得意で、周りには鉄道に詳しい方々ばかりで、車両や設備、歴史などの会話にはついていけない事が多々ありますが、入会当時に比べると知識の面で随分鍛えられたように感じます。同好会に参加した事をいい機会として、現在では地元の路線や車両を勉強してみようかと考えています。

最後になりましたが、同好会の更なる発展をお祈り致しまして筆を置かせていただきます。

#### 1.3.4 鴨井昌司

### 「工学院大学鉄道研究同好会発足にあたり」

鴨井昌司 [二部 化学応用デザイン学科 4年]

まず初めに、工学院大学鉄道研究同好会の発足にあたり、声を掛けてくださった山口君、阿久津君、小籠君、その他の方々に厚く御礼を申し上げます。私が工学院大学鉄道研究同好会に入会したのは上京するまで静岡の実家から見える東海道新幹線と東海道本線を見て過ごし、また、駅に掲出される「そうだ京都に行こう」などのシンプルなポスターを中学時代に集めていたからです。昔は、駅に掲出されたポスターを頂くことができました。(残念な事なのですが、他の方がポスターを貰う際のマナーの悪さが遠因になり現在は行われていません。)時代が変わり、最近の鉄道の話は暗い話題も多いと思います。今後、立ち上がったばかりの鉄道研究同好会ではぜひ明るい話題を提供できるような活動を行えたらと思います。私は、鉄道も好きですが駅やホームにある立ち食いそばなど付随するものをウオッチする事が楽しみでもあります。中学時代の冬、東北に住む親戚に向かう際、1人で静岡から列車を乗り継いで夜10時近くに郡山駅での乗り換えがありました。その待ち時間の際に寄った立ち食い蕎麦屋で今日はもう閉店だからと「掛けうどん」しか頼まなかった私に肉やコロツケ、てんぷらなど余った具をサービスで全て盛ってくれたおばさん。あの豪勢さは一生忘れないと思います。これまでの鉄道の旅で感じたことはその土地柄を鉄道や駅はよく表していると思います。ハードとしての鉄道に拘らずソフト面から鉄道を見ることができたら…そう私は思います。

#### 1.3.5 佐宗友裕

### 「鉄道研に至るまで」

佐宗友裕 [一部 電気システム工学科 1年]

電気システム工学科 1 年の佐宗友裕と申します。

私は幼少のころから電車が好きで近くの踏切に毎日、横浜線の 205 系を見に行っていました。私が住んでいたところは八王子の田舎だったのでこれしか見るものが無かったことがその理由かもしれません。そんな環境にいた私ですが、電車の系統などの細かい部分に興味を持ったのは最近で、JR 東日本 209 系や京王 8000 系の VVVF インバータの音を聞いたことが始まりでした。加速するときの変調音が当時の私にとって非常に新鮮に思えたからです。これ以来、鉄道関係の雑誌を読んだり、電車に乗りに行ったりするようになりました。しかし、写真を撮ることは恥ずかしくてなかなかできませんでした。

私は鉄道のことを詳しく学び、同じ趣味をもつ仲間たちと話すなど様々なことをしたかったのでこの大学を選びました。そして、高木先生から鉄道研が今年になって設立したことを聞き入会することにしました。これからは鉄道が好きな仲間たちとともに今までできなかったことをたくさんしたいと思います。

### 1.3.6 田淵正紀

#### 「工学院大学鉄道研究同好会発足にあたって」

田淵正紀 [一部 電気工学科 4 年]

皆様初めまして、私は工学院大学電気工学科 4 年の田淵正紀と申します。この度、工学院大学に鉄道研究同好会を設立するにあたり、設立メンバーの末席に名を連ねられたことは光栄の至りであります。

我が国の鉄道は、世界の鉄道の中でも特異な状況にあります。我が国は、地形が山がちであり、海岸部の平野地に大都市が形成されてきました。列島の形も相まり、都市間を結ぶ鉄道が長らく我が国の陸上交通の主役となっています。また、人口が密集しており、基本的に駅間距離が短い為、加減速性能に優れた動力分散方式の列車、即ち電車が鉄道車両の大半を占める状況にあります。現在では、貨物輸送はトラックに押され、最盛期と比すると可成り少なくなっていますが、旅客需要は変わらず旺盛です。

終戦の後、GHQ の統治のもと、我が国の陸上交通は車が中心となると予想され、その後高度経済成長期にかけてモータリゼーションが全国的に進展しました。これは、当時の世界的な潮流で、Door to Door な移動手段であり、プライベートな空間が持てる車もてはやされていました。欧州においても、鉄道は斜陽産業といわれ、いずれ自動車に取って代わられるものと予想されていましたが、それを覆したのは我が国が誇る東海道新幹線です。

持続可能な開発という言葉をご存知でしょうか？これは、1987 年に、国連の「環境と開発に関する世界委員会」(通称、ブルントラント委員会)が提出

した、「地球の未来を守る為に」という報告書(通称、ブルントラント報告書)の中心的理念である言葉です。我々の子孫に対し、自然豊かな地球をいかに継承してゆくか?人類社会の発展の為に、開発は不可欠ですが、地球環境に悪影響を与えないように開発を進めてゆく、というのが、現在の世界的な方針です。近年、地球温暖化が問題となっていますが、我が国のCO<sub>2</sub>の排出量を産業別にみると、輸送部門が多いことがわかります。特にマイカーの影響が大きく、これを公共交通に代替することによって、安全かつ環境負荷の低い輸送が可能となります。それらを鑑み、新幹線の登場以降、鉄道を始めとした公共交通の価値を見直そう、という機運が高まり、公共交通へのモデルシフトが進展しました。

その中でも、電気鉄道はとくに環境負荷が低く、大量輸送が可能で、安全である為、この利便性を向上し、より活発に利用してもらおう事が今後の課題です。又、電動機を発電機として用い、制動をかける電気ブレーキ、特に発電した電力を架線に返す電力回生ブレーキという、他の交通機関にない大きな利点を持っています。我が国では、この電力回生ブレーキが広範に普及しており、次のステップとしての純電気ブレーキの開発も進みつつあります。このように、我が国の鉄道技術は世界トップクラスであり、この先も世界の鉄道技術の牽引役たる期待がかかっています。一時期、バリアフリーという言葉が流行りましたが、ハードウェアとしてのバリアフリーだけではなく、ソフト面でのバリアフリーをいっそう進展させ、いかなる利用者にとっても利用しやすい鉄道、というものを築いてゆく必要があります。

しかし、昨今、昔ながらの寝台夜行列車の廃止が進み、全般的に列車の走行距離の短距離化が進んでいます。長距離列車は、車両および乗務員を長時間にわたって拘束し、天候不順や輸送障害などの際には乗務員の運用に大きな影響を与えます。利用率の低下も受け、この流れは致し方ないのかもしれませんが、長距離列車の持つ独特の旅情は捨て難く、未だ営業努力の余地があるのではないかと思います。車内での自由度が高いというのが、鉄道の自家用車に対する大きな利点の一つである訳ですから、食堂車の復活、寝台料金の値下げ等、打てる手が残っているのではないかと思います。また、臨時列車も減少の一途を辿り、地方の第三セクターの経営状況は依然厳しく、来るべき少子化によって乗客数の減少が見込まれていますから、鉄道の将来は一概に明るいとはいえないでしょう。

このような状況下において、新しく鉄道に関するサークルを立ち上げ、趣味の面からであれ、我が国の鉄道を盛り上げてゆけるなら望外の幸せです。同好会の運営に、私も微力ながら身を粉にして頑張りますので、皆様のご支援をお願いいたします。

## 第2章 沿革及び活動予定

太字は活動予定を表します。

=====2006年=====

- 6月
  - 阿久津・小籠・山口の3名が鉄研発起人となり、創立。一部代表に小籠、二部代表に阿久津が着任
  - 竹本正勝先生が副顧問着任
  - 高木亮先生が顧問着任
  - 16日 第1回ミーティング(於：高木研)
  - 曾根悟先生が特別顧問着任
  - 20日 会員相互連絡用メーリングリスト稼働開始
  - 23日 第2回ミーティング(於：高木研)
  - 30日 第3回ミーティング(於：23F ラウンジ)
  - 以降、夏季休暇を除くほぼ毎週定例ミーティングを開く。
- 7月
  - オープンキャンパス用模型製作プロジェクト開始
  - 24日 第1部文化会に正式に同好会として登録
  - 29,30日 八王子オープンキャンパスにて展示(於：夢づくり工房)
- 8月
  - 05日 第1回鉄研旅行開催、(行き先：横川・碓氷峠鉄道文化むら  
参加者：一般学生2名、学外者2名含む15名)
  - 19,20日 大学の先生と楽しむ理科教室にて展示(於：夢づくり工房)
  - 阿久津多忙につき、二部代表に山口着任
- 9月
  - 13日 八王子にて1,2年対象の鉄研ゼミを開催(以降 隔週開催)

## ● 10月

- － 7日 工学院大学後援会 キャンパス見学会開催。(新宿キャンパスにてパンフレット配布)
- － 14日 同上(八王子キャンパスにて模型展示、新宿キャンパスにてパンフレット配布)
- － 28,29日 工学院大学第44回八王子祭にて模型展示、会誌「Urban Tech Railway Journal」創刊準備号発行。

## ● 11月

- － 3,4日 合宿(河口湖)
- － 18,19日 工学院大学第57回新宿祭にて模型などの展示、会誌「Urban Tech Railway Journal」創刊号発行。

## 編集後記

ぎりぎりのスケジュールの中、なんとか創刊準備号を発行することができました。同好会の発足から数ヶ月、スタートダッシュに必要な瞬発力を備えたメンバーが結集して今、初めての山を一つ越えたと思います。これから先はなだらかなのかはたまた起伏に富んでいるのかはわかりませんが、少しずつでも着実に進むために必要なのは瞬発力より持久力です。この会誌を作り続けることが、継続的な活動の足がかりとなる一里塚<sup>マイルストーン</sup>となると思います。

創刊準備号であるこの号の通し番号は (Vol.000) となっています。現在の予定通り、この会誌が年 2 巻発行されるとして、記念すべき 50 号の発行は 2031 年、3 桁目に数字が刻まれる 100 号の発行は 2056 年となります。2056 年といえば、計算上私はとっくに定年を超えた 71 歳。世代を超えて活動が続くことを思い描きつつ、筆を置きたいと思います。

【山口直彦】



## 次号予告

Urban Tech Railway Journal[Vol.001]

2006年11月18日発行予定

[内容]

八王子レポート 八王子ゼミの発表から

旅行記 横川・碓氷峠鉄道文化村～第1回懇親旅行～  
河口湖～第1回鉄研合宿の報告～

イベントレポ 第44回八王子祭

発起人座談会 「なぜ今鉄研なのか？」

Urban Tech Railway Journal

創刊準備号 (Vol.000)

第1刷 2006/10/28

発行 工学院大学鉄道研究同好会

表紙写真 「学生工房にて」

(撮影: 山口直彦, 鴨井昌司 デザイン&編集: 山口直彦)